

News Letter

目次:

センター設立	1
設立記念 シンポジウム	2
総長あいさつ	2
名取はにわ先生 基調講演	2
稲葉先生講演	3
パネルディスカッ ション	3
相談窓口の開設	4
稲葉先生ラジオ 番組出演	4

女性研究者支援センター設立

2006.9.5 京都大学では、女性研究者の包括的支援を目的として、「女性研究者支援センター」を設立しました。

京都大学の女性教員比率は、増加傾向にあるものの6.7%（平成17年現在）であり、多様な研究者の活躍促進という観点からも、女性研究者が能力を最大限発揮できる環境の創出に積極的に取り組んでいく必要があります。

本センターでは、文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成プログラム」の支援も受け、京都府・京都市・関連NPO法人等、地域との連携を図りつつ、各種プログラムの包括的な実施を目指します。

卓越した京都大学女性研究者育成を目的とした「京都大学モデル」は、右記の事業を行っていきます。



Ⅰ. 交流・啓発・広報 事業

「環境改善」「男性意識改革」「女性研究者志願者増加」によるサポート

- ①女性研究者の増加とキャリア促進のための支援
- ②女性研究者支援のための啓発・広報活動

Ⅱ. 相談・指導 事業

「精神面のケア」「情報の提供」「Role Model 提示」によるサポート

- ③女性研究者および関連する環境に対する相談窓口の設置

Ⅲ. 育児・介護支援 事業

「家庭における負担軽減」によるサポート

- ④患児保育施設の設定
- ⑤女性研究者のための多目的スペース設置

Ⅳ. 柔軟な就労形態による支援 事業

「研究活動持続性の保証」によるサポート

- ⑥勤務体系の柔軟化に関する検討
- ⑦産休・育休・介護休業中における研究・実験補助者の雇用
- ⑧在宅でのオンラインジャーナル閲覧援助

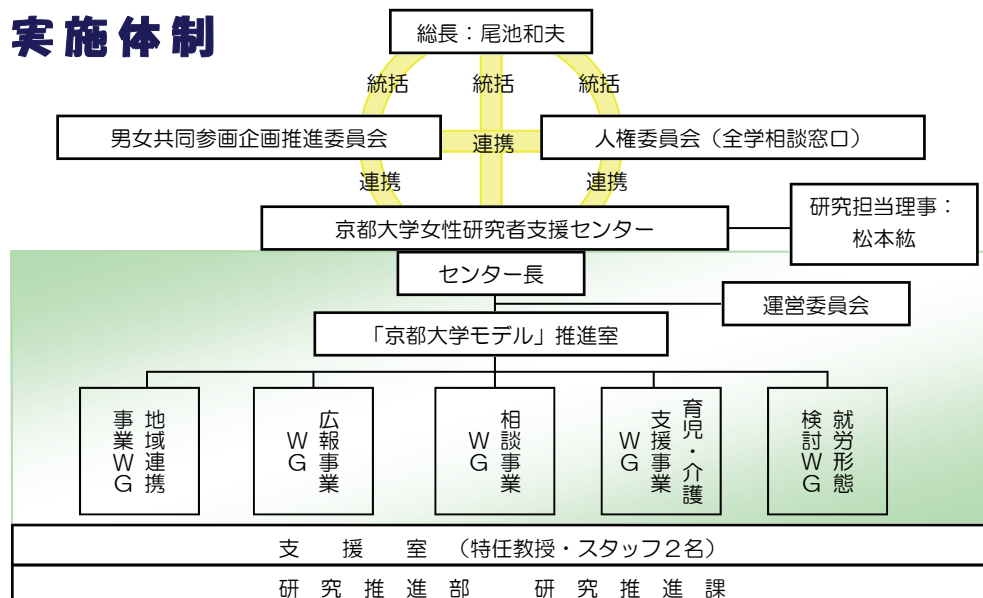
←2006.10.2 設立会見の様子

前列左から塩田浩平 女性研究者支援センター長（医学研究科教授）、稲葉カヨ「京都大学モデル」推進室長（生命科学研究科教授）、登谷美穂子 女性研究者支援センター特任教授、後列 伊藤公雄 広報事業ワーキンググループ主査

Topics:

- 2006.9.5 女性研究者支援センター設立
- 2006.10.9 設立記念シンポジウム開催
- 2006.10.26稲葉先生がKBSラジオ番組に出演
- 2006.11よりカウンセリング室を開設

実施体制



設立記念シンポジウム

2006.10.9 時計台記念館において「京都大学女性研究者支援センター設立記念シンポジウム」が開催され、120人を超える学内外の研究者、市民が参加しました。シンポジウムは、本センターの設置を記念するとともに、今後の方向性を議論するために企画されたものです。当日は、共催、来賓の方々より、ご挨拶をいただき、その後の講演を受け、パネルディスカッションが行われました。参加者の皆様より質問や、熱心な討議をいただき、予定時間を超過しての閉会となりました。また、シンポジウムに合わせ、臨時託児室を開室し、子育て中の参加者支援を行いました。

尾池和夫総長あいさつ

平成18年9月5日、本学は女性研究者支援センターを設置いたしました。その発足に際して、京都府、京都市の方々のご臨席のもとに、ここに記念シンポジウムを開催することができ、心から喜んでいる次第でございます。本日は、京都府から小石原 範副知事、京都市からは星川 茂一副市長の参加を頂いております。このセンターの設置は、京都大学の長年の念願が、文部科学省科学技術振興調整費の助成を受けることによって実現したものです。

このシンポジウムを開催するにあたり、センターの実現に際して援助と協力をして下さった、ご来賓の文部科学省、科学技術・学術政策局の古川 晃科学技術・学術統括官、内閣府男女共同参画推進課の安田 伸企画官、また「大学における男女共同参画の推進」と題して基調講演をしていただく名取 はにわ前内閣府男女共同参画局長に、深く感謝申し上げる次第です。

さらに、本日のプログラムの後半で行います『「京都大学モデル」は何をめざすのか?』と題したパネルディスカッションにパネラーとして参加して頂く、オムロン株式会社執行役員 藤原 啓史氏には、企業の立場からの貴重なご意見が頂けることと期待しております。

本学には約3千人の教員がありますが、そのうち女性は約200人、割合にしてたった6.6%です。しかし、博士学位授与者の21%が女性であることとの関係を分析してみることも必要ではないかと思っています。女性教員が少ない原因はいろいろ考えられますが、一番大きいのはやはり、女性になかなか門戸を開いていない京都大学の特質があるのではないのでしょうか。もちろん、女性が京都大学の教員として働くための労働環境が、また女性研究者として活動するための仕組みが十分でないということも、その参画を困難にしている原因の一つでしょう。

このような状況を女性研究者自らが打開し、男女共同参画の社会を実現しようと、本学では、「女性教員懇話会」や「女性研究

者の会」などに代表されるネットワークがあります。男女共同参画をめざす社会全体としての昨今の動きがあっても、京都大学はなかなか動こうとしない大学ですが、ようやくこの女性研究者支援センターの設置が実現しました。これからいよいよ本腰を入れて、という思いであります。

本学の女性研究者は大学人であると共に、申し上げるまでもなく地域で生活し、子育てをしている市民でもあり、大学の中だけでの支援ではとうてい困難な点が多々ございます。そういった意味で、本学が提案いたしました女性研究者の包括的支援「京都大学モデル」は、卓越した女性研究者を育成し援助する環境を作り、本学に留まらず地域行政、NPO法人などと連携して行うことを大きな特徴としております。

昨年度、本学には男女共同参画基本理念のもと、男女共同参画企画推進委員会が設置されました。この推進委員会のもと、センターを中心に女性研究者が研究者、教育者として、その力を十分に発揮できるよう研究環境改善の努力を、私自身もしていきたいと思っておりますし、京都大学の教職員全員の理解にもとづく協力を期待しております。

本シンポジウム開催に当たり、ご協力くださいました関係の皆さま、ならびに本日まで参加の皆さまにお礼を申し上げ、女性研究者支援センター発足に当たっての私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



名取先生基調講演

名取先生には、「大学における男女共同参画の推進」と題して基調講演をしていただきました。

はじめに、わが国が「国際的に見ても女性参画が進んでいない」現状を具体的な統計数値を示してご説明いただきました。男性と比較し、女性は生活時間の中で家事・育児等に費やす時間の占める割合が依然として高く、男女共同参画の状況をGEM（ジェンダー・エンパワメント指数）の国際比較で見ると、日本は80カ国中43位という位置です。

科学技術における女性の参画状況の面でも、世界的に後れています。日本の研究者の女性割合の高さは、27位であり、理工系分野を進路として選ぶ女子学生の割合が少ないことと大きな関連があります。技術者・研究者に女性が少ない理由としては、①家事と仕事の両立が困難、②職場環境が上位にあげられ、女性の方

が採用、昇進、雑務の負担に関する不公平感を強く持っています。

また、男女共同参画「ポジティブアクション」としてゴール・アンド・タイムテーブル方式、女性センター、男女共同参画センター、女子大学等の具体例を挙げていただき、法律、国の施策等による各支援プログラムの実施により、目標値に少しずつ近づいている事例をご紹介いただきました。



稲葉先生講演要旨―樹状細胞に魅せられて―

現在、私は生命科学研究科高次生命科学専攻体制統御学講座において、生体応答学分野を担当しており、いわゆる免疫生物学といわれる領域の研究を行っています。免疫応答は、結核菌に対するツベルクリン反応やまもなく季節が到来するインフルエンザウイルスに対するワクチンなど、日常生活においてもなじみが深い生体防御システムです。現在の免疫学は、18世紀の最後の頃にエドワード・ジェンナーが開発した天然痘ワクチンに始まるといわれています。最初に体に入ってきた細菌やウイルスなどの微生物に対して、2度目にはより素早く、強力で特異性の高い応答を誘導することにより、それらを体内から排除しようとするものが適応免疫応答と呼ばれる反応です。また、生体防御には、特異性はなく、何度でも同じ強度の反応しか起こらない自然免疫応答と呼ばれる応答もあります。これら2つの免疫応答には多種類の細胞が関与していることが多くの研究者の努力によって分かってきました。これらの細胞は骨髄幹細胞に由来する白血球細胞で、そのうちの1つが私の研究対象としている樹状細胞（dendritic cells）です。現在では、免疫応答の誘導と制御における司令塔として中心的役割を担うことが明らかになっています。しかし、この研究に着手したのは、京都大学の理学部動物学教室の助手になってからです。ほとんど無名で、機能についても疑問視されていた細胞です。

院生の時代は、修士課程では骨髄移植後のリンパ系組織の再構築を調べていました。博士過程では抗体産生応答におけるT細胞の制御作用の解析を行い、これによって学位を取得しました。しかし、学部は奈良女子大学の理学部生物学科植物学専攻で植物生理学教室において卒業研究を行いました。将来の進路をぼんやりと考え始めたのは学部の2回生の頃です。研究者になりたいと考えていた訳ではありません。ただ、就職するという選択肢は大きくはありませんでした。転学部あるいは学士入学をして別の分野で学んでみることに取りあえず大学院に進学するという2つの方向です。進学という中では当時の奈良女子大には博士課程が設けられていなかったため、博士課程のある大学院を受験する事にしました。大学院に合格してからでも学士入学のための資料を集めて

いました。しかし、考えていた大学で学士入学試験を行わないことが明らかになったため、大学院に進学しました。大学院在学中にもいろいろな壁はありましたが、運良く助手になることができ、

研究を継続する場が与えられました。しかも、助手としての研究の中で、長く続けられる研究テーマを得られたことは、大変にラッキーなことでした。1981年東京で開催された国際シンポジウムで米国ロックフェラー大学のザンビル・コーン（Cohn ZA）教授と出逢いました。彼の研究室で世界に先駆けて樹状細胞を同定し、その機能解析を行っていたラルフ・シュタインマン（Steinman RM）博士と共同研究という形で渡米したのは1982年の秋です。この時、夫はテキサスに留学していました。1984年の年末に共に帰国しましたが、その後も私はロックフェラー大学での客員のポストを与えられ、現在も共同研究を継続しています。

私が研究を進めてこられたのは、運が良かったことも1つですが、それ以上に共同研究者に恵まれたことと、私の研究に理解を示し協力的であった夫と両親からの支えがあったからだと思います。実験は今やひとりで行えるものではありません。研究室の中だけでなく、他機関の研究者と共同で進める研究も多くなっています。豊かな人間関係の中で、相互の協力のもとに、さらなる研究の進展がはかれれば良いと考えています。

今回の支援事業『京都大学モデル』は、女性研究者の育成とそ

ののための環境整備を行う上で高く位置づけられる重要なプロジェクトです。そのため、多くの皆様の理解と協力のもとに大きく進めていきたいと考えています。

ありがとうございました。



パネルディスカッション

後半は、パネルディスカッションで始まりました。

京都府 八島氏、京都市 平井氏より男女共同参画の自治体での取り組み事例を、オムロン株式会社 藤原氏よりは、



企業での女性活用の取り組みの事例をご紹介いただきました。

会場の参加者よりも、質疑があり、活発な意見交換を行うことができました。

プログラム

司会 登谷美穂子（京都大学女性研究者支援センター特任教授）

13:30 開会 主催者あいさつ 京都大学総長 尾池和夫
共催者あいさつ 京都府副知事 小石原範和氏
京都市副市長 星川茂一氏

13:50 来賓あいさつ

文部科学省科学技術・学術政策局 科学技術・学術総括官 吉川晃氏
内閣府男女共同参画局推進課 企画官 安田伸氏

14:00 基調講演「大学における男女共同参画の推進」

早稲田大学客員教授 名取はにわ氏（内閣府前男女共同参画局長）

14:45 休憩

15:00 講演「樹状細胞に魅せられて―女性研究者としての歩み―」
京都大学女性研究者支援センター「京都大学モデル」推進室長
稲葉カヨ（京都大学教授）

15:20 パネルディスカッション「京都大学モデル」は何を目指すのか？

【パネリスト】 オムロン株式会社 執行役員 藤原啓史氏
京都府府民労働部女性政策監 八島一美氏
京都市文化市民局共同参画社会推進部 男女共同参画推進課長 平井潔子氏
京都大学 稲葉カヨ

【コーディネーター】 伊藤公雄（京都大学教授）

17:00 閉会あいさつ

京都大学女性研究者センター長 塩田浩平（京都大学教授）

女性の悩み相談

相談事業実施ワーキンググループで検討を重ねてきました「女性の悩み相談」を、11月10日より開始します。

相談は、専門の女性カウンセラーが対応します。ひとりで悩まず、どのようなことでもご相談ください。

相談日は、毎週金曜日です。（開室時間は週によって異なります。）

相談室は、吉田キャンパス本部構内です。相談は無料です。秘密は厳守されます。

11月の開室日

11月10日（金）14:00～17:00

11月17日（金）14:00～17:00

11月24日（金）10:00～13:00

11月28日（火）10:00～13:00

予約・お問合せ

まず、お電話（またはメール）で、お問合せ・ご予約ください。

<電話の場合>

電話：075-753-2438

（予約担当者への直通電話です）

受付時間：10:00～16:30

（月曜～金曜）

<メールの場合>

メールアドレス

w-soudan@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

受付用フォーマットは、

ホームページにあります。



女性の悩み相談を開始

無料です。

秘密厳守されます。

研究者や、研究者になろうとするあなたの生き方に関わる相談、不安やストレス、女性への暴力など……

どのようなことでもご相談ください。

電話：753-2438

（担当者への直通電話です。）

稲葉先生がKBSラジオ番組に出演

2006.10.26「笑福亭昇瓶のほっかほっかラジオ」番組（月～金 6:30～10:00）にて、「女性研究者をバックアップ！支援センター設立」の題名で、約15分間、稲葉先生が司会者の質問に電話で答える形式で生出演されました。以下、概略です。

Q：「京都大学女性研究者支援センター」誕生の経緯は？

A：男女共同参画のもとに、女性研究者にも対等の立場で社会貢献の場を提供するために、支援活動や教育の充実が必要であるとの考えからです。文部科学省の「科学技術振興調整費」の助成を受けた事業です。今回助成を受けたのは全国で10大学、関西では、京都大学と奈良女子大学の2校です。

Q：育児等で研究を続けていく女性研究者が少ないのでしょうかね

A：特に小さい子がいると困難です。また、大学院生は、保育園利用が認められません。京都大学では、教員、院生が研究を続けていくために連携を模索してきた経緯があります。院生が始めた「共同保育」を大学との連携で「大学の中の保育所」とし、現在、京都市の認可保育園になっているものもあります。認可保育園としたことで、共同保育の費用負担を軽減できましたが、一方で院生の利用ができなくなったというジレンマがあります。

Q：センターが取り組む支援活動は？

A：育児・介護に関する支援を、京都府・京都市との連携を行いながら実施していきます。11月からは、カウンセリングをスタートします。この事業は、京都市との連携で行うもので、京都市よりカウンセラーに来てもらいます。来年1月には、京都大学病院内に患児保育施設を設置する予定です。病気で一般の保育園で保育してもらえない児童を保育します。さらに、育児・介護期間中に、研究上の補助者をつけていく予定です。研究は「下りのエスカレーターに乗って、一生懸命上ろうとしているようなもの」と表現された方がいましたが、育児・介護期間中、せめて「とどまれる」よう支援しようとするものです。実験科学は、研究室でしかできないことが多いので、研究・実験に関する補助を検討しています。また、女性研究者だけでなく、女性が働きやすい環境を整えるために、社会全体で交流、啓発を行っていかねばならないと考えています。



Center for Women Researchers

〒606-8501
京都市左京区吉田本町

電話 075 (753) 2439

FAX 075 (753) 2436

Email: cwr-admin@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

HP: <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

センターでは、事業実施の基礎情報を集めるため、本学的女性研究者に対し、環境調査のアンケートを送付させていただきました。早期の回答にご協力いただきますよう、よろしくお願いします。

京都大学女性教員懇話会 設立25周年記念シンポジウム ダイバーシティへの取り組みに向けて

【主催】京都大学女性教員懇話会・同06会

【日時】平成18年12月9日（土）

14:00～18:00

【場所】京都大学理学部2号館1階大講義室
（北部構内 正門入ってすぐ左）

【共催】女性研究者支援センター

どなたでもご参加いただけます。